

油彩

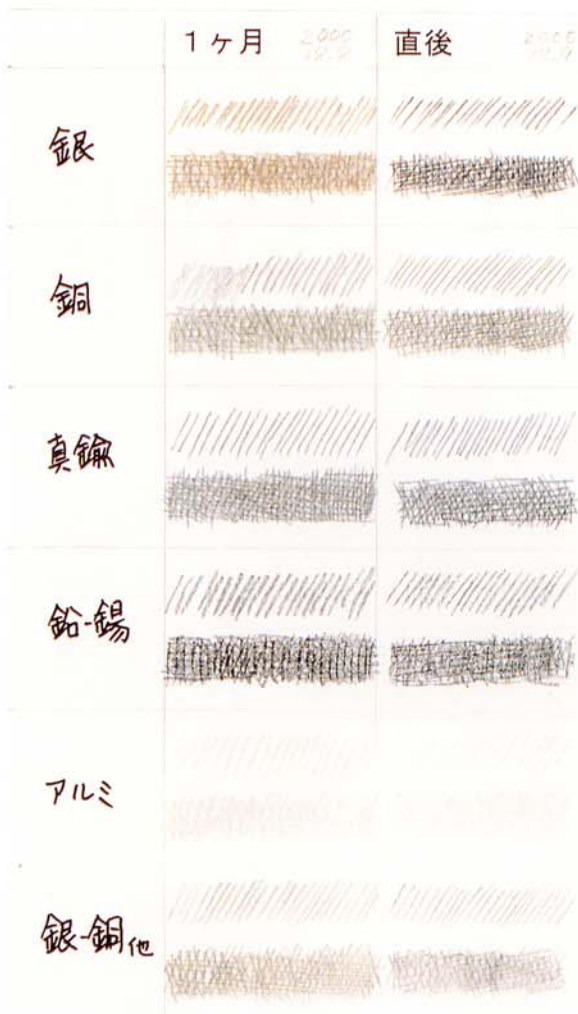
(テンペラ併用)

メタルポイントで描く②

三浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東京学芸大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
 油絵公開展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼現
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品。文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(96
 5.97) 春陽会会員

(図1) 各種メタルポイントの時間経過に伴う変化
 左列は前号で描いておいたもの。右列は今回のもの。1か月間で変化しているものと、していないものがあることがわかる。
 特に、銀筆は赤みがかってきている。



■ 描き方の注意

メタルポイントは基本的に硬い素材ですから、鉛筆のように頻繁に削り直す必要はありません。それでも、金属の微粒子が画面に付着して線ができるため、だんだん

磨り減ってきます。メタルポイントの同じ部分ばかりで描いていると、ナイフのような鋭いエッジが形成され、ホルダーを持ち替えた時に、そのエッジで画面を削り取る危険があります。したがって、時々磨き直す必要があります。

これが面倒という方は、ホルダーを少しずつ回転させながら描いていきます。こうすれば均等に磨耗していきますので、いつでも滑らかに描くことができるわけです。(私は不精なので、この手を使っています)

先端の磨き方は、前回書いた耐水ペーパーでの研磨が簡単な方法です。これは#800と#10000くらいの耐水ペーパーに水を数滴垂らし、ホルダーを廻しながら磨きます。あまり先端が鋭くなる、前述のように画面を削り取ってしまいますので、かすかな丸みをつけることがコツです。

この他に、砥石を使う方法もあります。オイル・ストーンという砥石を文具店などの製図コーナーで手に入れ、機械油を垂らして磨きます。この方法では、かなり精密な磨き方ができますし、一度購入すると半永久的に使えますので、経済的でもあります。

■ 修正

メタルポイントは鉛筆と同じように消すことができますが、私は、基本的には描き直しはしません。鉛のような軟らかい金属のような場合は、食パンや練りゴムだけでは簡単に消えませんが、銀や今回の

真鍮のような硬い金属の場合、消えた跡が溝になったり、下地がツルツルになってその上の線の濃さが違うものになったりするので、私はなるべく消さないで描いているということなのです。したがって、できるだけ軽く薄く描き始め、次第に強く濃くしていきます。

それでもハイライトのような、とても小さな部分で真っ白にしたい時などは、黒くしてから消した方が良い場合があります。このような時は、消しゴムも利用します。製図で使う消しゴム用マスキング・プレートを使い、周りを消しすぎないようにします。広い面積でどうしても消したい箇所が生じた場合は、スチール・ウールまたはサンドペーパーなどで削り、固く絞った濡れ雑巾で軽く整えます。描き過ぎた部分への、白い絵具を塗る修正は、汚れたグレーになる危険がありますので、あまり勧められません。しかし、最小限の使用としては水彩、グアッシュ、

(図2)「飛はない小鳥」23×26(cm) 紙に着色した白亜地、銀筆・水彩
白亜にテール・ペルトとイエロー・オーカーを各々混ぜた物を二層に塗り、紙やすりで
下の層を研ぎ出したフレパレーション。さらに水彩で着色



「尖筆で素描をしたのちに、その素描をさらに明確にしたければ、周縁部や必要な箇所をインクでペンを用いて確定する。それから、インクの水溶液、すなわち、胡桃の殻一個分の水を用意し、中にインク2滴をたらしたもので、衣袋に陰影をつける。つまり、銀栗鼠の尾でつくった、穂先を丸く詰めた筆を用いて、含ませた液を固目に絞った上で、陰影をつけるのである。暗さに応じて、さらに数滴のインクを加えて液を濃くし、同じように行なう。似た方法では、写本彩飾画家が使用する顔料および絵具裂^{えのひ}で陰影をつけることも出来る。顔料を溶く結合剤としては、アラビア・ゴム、あるいは十分に掻き立てて溶解させた卵白を用い給え。」(絵画技術の書、辻茂編訳他・岩波書店、1991年)とあります。

ここでいう、アラビア・ゴムを結合材に使う絵具とは、現在の水彩絵具そのものです。また、卵白の絵具は、かつて聖書などの写本を描いたテンペラ絵具で、このコーナーでいつも使っているテンペラとは異なります。卵白には油分が含まれず、エマルジョンにはなっていないのです。いわば、卵の水彩絵具と理解していただければ良いでしょう。

卵白はそのままではズルズルした粘液状ですから、溶きほぐすために泡立てる必要があるのですが、かつては卵(卵黄)テンペラのワニスにも使われていました。第一粘液と言われるものと、第二粘液というものがあり、それぞれ使い方が異なっていたようです。

第一粘液は、まず、大きめのポウルに卵白を入れ、フォークか泡立て器で完全に泡立てます。しばらく放置すると、泡の一部は卵白に戻り、底にたまります。これをテンペラ・メデイウムやワニスとして使うのです。さらに残った泡を、少量の水に入れた容器に浮かべ、一晩放置すると極僅かを残して水に溶けます。この水溶液が第二粘液で、完成したテンペラ画にすぐに塗布するワニスとして使用していました。

下地を白ではなく有色にすることで、柔らかな効果を得ることが出来ます。膠と混ぜる時に白色顔料だけではなく、少量の有色顔料を加えるだけで簡単に作れます(図2)。

また、水彩、鉛筆など、他の材料との併用で、表現の幅が広がられます。今回の作例では、水彩、黒鉛、鉛筆などを併用してみました。

黒鉛とは鉛筆の原料で、天然に産する(あるいは人工的に作った)結晶した炭素を主成分としたもので、石墨とも言われています。そのものだけで紙などに付着する性質があり、この性質を利用して鉛筆が作られています。鉛筆は黒鉛に粘土を混ぜて焼いたものです。混ぜる粘土の量で、9H〜HB〜6Bなどの硬さの違いが出来ます。HはHard、BはBlackの頭文字です。

ちなみに、「黒鉛」も「鉛筆」も鉛が入っていないにもかかわらず、「鉛」の文字を使いますね。これは、メタルポイントとして使われた、鉛尖筆(レッド・ポイント)と混同されているからです。正確には、黒鉛はグラファイト(Graphite)

テンペラなどの白を用います。この上からの加筆は、下地のマチエールが変更されているので、色味が変わってしまう危険があります。できるだけ最後のハイライトのみにとどめます。

■加筆

どんどん描き込んでいくと、こ

れ以上乗せられないという限界があります。それは、画面に付着した金属の粒子によって、その上に再び金属を乗せようとすると滑ってしまい、黒くなってくれないからです。メタルポイントで足りない「黒さ」は、水彩などで加筆します。

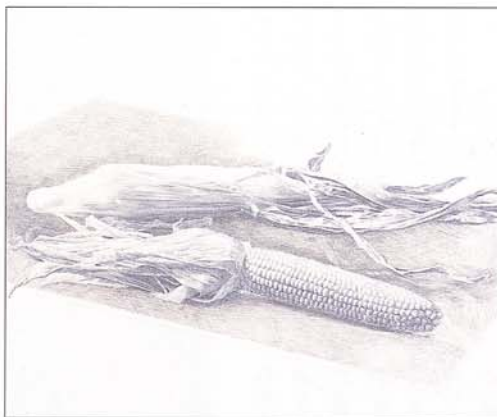
チェンニニの「芸術の書」には、

の水彩絵具と理解していただ

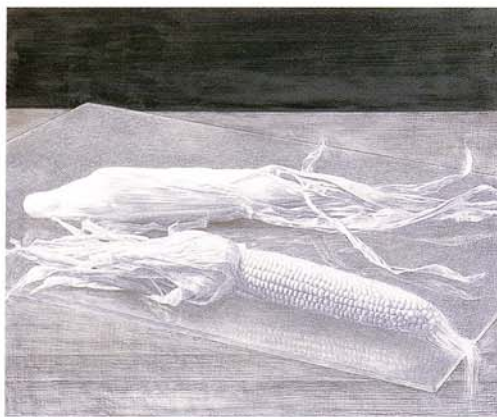
は、擦ると下地の膠が溶けてきますので、ハッチングで加筆します。

は、黒鉛はグラファイト(Graphite)

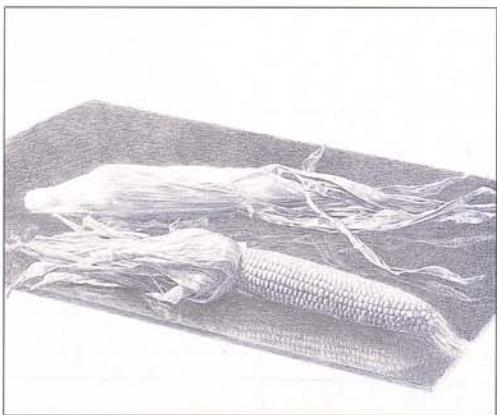
(制作過程5)
ガラスの部分も描く。



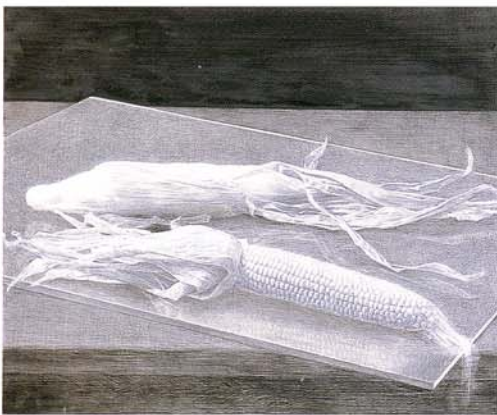
(制作過程7)
テーブルも描く。背景は黒の絶対空間にする予定で、水彩の黒を塗っておく。メタルポイントではできない黒が欲しいため。



(制作過程6)
暗くしたい部分は、縦横斜めの他に、角度を変えて交差線を引き、密度を高めていく。

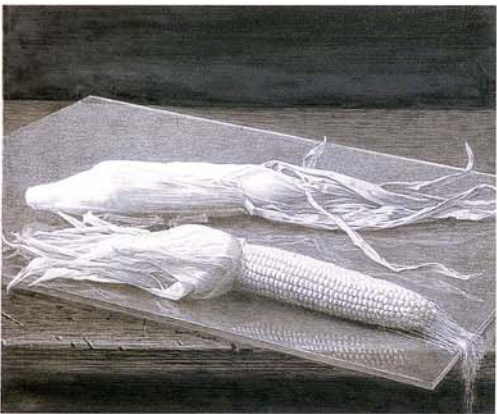


(制作過程8)
トワモロコシやガラスの最暗部、およびテーブルの手前の暗い部分に水彩黒で加筆する。



(制作過程9)

最暗部と中間調子との間の黒さの足りない部分は、鉛筆4B〜6Bを併用する。テーブルの木目やキズの表現も水彩黒で描く。その上から、ベトロールで溶いた黒鉛を薄く延ばして塗っておき、乾いてからキズのハイライトを消しゴムで消す。
この後、背景部やテーブルなどの暗い部分に、もう一度ベトロールで溶いた黒鉛を塗り、全体の調子を整えて完成。



phite)、鉛はレッド(Lead)と言いますが、「鉛筆」の名称は「lead point」の直訳なのです。黒鉛が発見された当初(1554)から、黒い鉛(Black lead)と呼ばれ、素描材料として一般的に使われる様になっても(18世紀頃)、この名称で呼ばれていたと言います。

メタルポイントを描く簡単な方法としては、陶土の加えられた紙(ケント紙、アート紙、アート・ポスト紙など)を使うことです。

これらの紙には、プレパレーションを施さなくても描くことができます。ただし、下地塗料を施したものは異なり、表面が滑らかなため、濃いはつきりとした線にはなりません。

また、ポスターカラーや水彩、グアッシュなどの白い絵具を紙に塗布したものにでも、描くことが出来ます。これは作例で示したプレパレーションに遜色のないものになります。修正が出来ない(削れない)ということが異なる点です。

■仕上げ

基本的には、他のドローイング作品と同じようにそのまま保存しますが、絵具のようにバインダー(接着成分)が含まれないため、擦れたりすると落ちてしまう危険



(完成作品) 「玉蜀黍」 F8号

木質繊維合板にチタニウム地、真鍮尖筆・水彩・黒鉛

があります。ガラスの入った額縁に入れておけば完璧なのですが、定着液などを吹きかけておくことで保護することもできます。

今回の作例の場合は、ワニスを塗布しました。市販のスプレー式アクリル系ワニスを吹きかけましたが、これに限るということではありません。デッサン用や水彩用、またタブローでも同様です。基本的にはすべて、樹脂(最近の物は合成樹脂が多い)を揮発性油で溶かしたもので、その違いは含まれる樹脂分量だけです。

銀筆などの時間をかけて変化(酸化や硫化など)する金属は、表面を覆われていても、下地から浸透してくる酸素、硫黄などで、徐々に反応していきます。

今回の作品は、結果的に黒鉛の面積が多い作品になりましたので、メタルポイント本来の淡い色彩が十分発揮されているとはいえないかもしれません。しかし、エッチングのようなシャープな線での表現は、他の素材にはない独特なものです。これらの技術を示した資料はほとんど残っておらず、私の手探りだけで書いてきましたが、これから再評価されても良いのではないのでしょうか。